

The Mille Has Times

2022
SPRING

いよいよオープン 高まる期待
6月記念式典「大いなる秋田」演奏

大ホール

Interview

小山実稚恵さん／畑澤聖悟さん

Pickup!

県民・市民参加型ミュージカル「櫻の記憶・蓮のトキメキ」

秋田の 皆さんの力に

Interview

あきた芸術劇場ミルハスへの「思い」



【 小山実稚恵さん (ピアニスト) 】



©ND Chow

人気、実力ともに日本を代表するピアニストの小山実稚恵さんが、2022年9月23日のあきた芸術劇場ミルハスのグランドオープン、こけら落としコンサートで新日本フィルハーモニー交響楽団と共演する。小山さんはミルハスでの公演について「クラシック音楽は何百年も前から連綿と演奏され、人々の心の拠りどころになってきました。苦しい時にもそれを乗り越えていく力があります。ミルハスの門出を祝うとともに、秋田県民の皆さんの力になるような演奏を披露したいです」と意気込みを語った。小山さんにミルハスへの期待などを聞いた。



©Hideki Otsuka

「幸せ感じる劇場に」

—ミルハスでのこけら落としコンサートでは新日本フィルハーモニー交響楽団との共演が決まっているが。

新型コロナの感染拡大によりいろいろな社会活動、文化活動が制限されています。そのような状況の中で完成した劇場のオープン記念に演奏できるのは、大変うれしく、楽しみにしています。ミルハスの新たな旅立ちに立ち合い、聴衆の皆さんと一緒に未来に向かって歩んで行きたいという気持ちもあります。

—どんな演奏を披露したいか。

演奏というのは楽譜があつてするものですが、単に楽譜に書かれた音を演奏するのではなく、楽譜の中に込められた思いや気持ちを表したい。そう思っています。ミルハスではラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を演奏します。このコンチェルトは“再起”の作品でもあります。心を病んだラフマニノフがこの曲で自身の新しい境地を自ら開いた、そういう作品です。東日本大震災後には「復興」の気持ちを込めてよく演奏してきました。今回も長いコロナ禍の中で、この曲を選んだことに運命的なものを感じます。演奏を聴いた人たちが未来へ勇気と希望を持ってほしいといった決意を胸にピアノに向かいたいです。

—ミルハスにどんな劇場になってほしいか。

劇場は人が集まって、単なる日常を越えた心に残るものを得られる場でもあります。県民の皆さんに愛され、そして音楽をはじめとする文化に触れ、幸せを感じられるような劇場になってほしいです。ミルハスのそばにお堀があつてそこに蓮の花が咲くと聞きました。ミルハスは「見る蓮」なのかと誤ってしまいました。蓮は静けさの中にあつて華やかさも、心を穏やかにします。劇場を訪れた人たちが、後になって演奏などを振り返った時に、その場面が瞬時によみがえってくるような劇場となればと思います。

—過去に秋田で公演した時の思い出は。秋田の印象は。

秋田の観客の皆さんは静かではあります

が、内には情熱を秘めていると強く感じています。クラシック音楽をじっくりと受け止めてくれるという印象が強いです。食べ物もおいしく、いぶりがっこ、ハタハタのしょつつる鍋、キリタンポ鍋、秋田落の砂糖漬けは大好きです。それから、おしゃれな雰囲気の方が多いとも感じています。

「心を込め演奏する」

—ミルハスに設置するスタインウェイのピアノ選定を務めました。

ピアノという楽器は人間と同じようにそれぞれの個性があります。ピアノが持つ気質を受け止めながら、無理なく伸びやかな音が出せるピアノを選びました。2台ともボディーの素晴らしいピアノだと思いますが、その上で1台は明るく華やかな音が、もう1台は深みのある音が出るピアノ、そんな感じだと思います。それぞれ自然でありながらタイプは違うピアノです。演奏者の好みや多様な曲にも十分に応えられるピアノ、将来性もあるピアノだと思います。

—秋田で音楽に携わっている人たちにメッセージを。

ミルハスのオープンでいろいろな音楽に出会うチャンスが生まれます。生の音を聴くことは一番贅沢なことであり、人間の幅も広がります。若い人たちにはど



選定したスタインウェイのピアノの前で笑顔を見せる小山さん

んどん足を運んでもらいたいです。自分のふるさつで活動が続けることは素晴らしいことです。秋田の人たちの応援を受けて活動し、それを若い人たちに伝えていってほしいです。

—最近の活動について。

コンサートはコロナ前の状態に徐々に戻ってきています。ただコンサートの前にPCR検査を受けるなど必要な準備は怠れません。コンサートを開けること、生の音楽を奏でることができることはありがたいことだとあらためて気づかされました。まだ今もコロナの先行きは不透明ですが、私ができるのは精一杯心をこめて演奏すること、それしかないと思っています。

©Wataru Nishida



こやま・みちえ

宮城県生まれ。チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクール入賞。以来、常に第一線で活躍。協奏曲のレパートリーは60曲を超える。国内外の主要オーケストラとの共演も多数。2005年度文化庁芸術祭音楽部門大賞、16年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。17年度には紫綬褒章を受章。

ふるさとに 誇りを持ってほしい

〔 畑澤聖悟さん（演出家） 〕

ミルハス開館記念イベントとして県民・市民参加型ミュージカル「樺の記憶・蓮のトキメキ」が2023年1月に上演される。演出を担当する畑澤聖悟さん（57）＝五城目町出身、青森市住＝に、ミュージカルにかける思い、ミルハスへの期待などを聞いた。畑澤さんは「秋田に生まれ、暮らしている人たちが、ふるさとに誇りを持てるようなミュージカルにしたい」と話している。

不安より楽しみ大きい

―県民・市民参加型ミュージカルの演出依頼を受けたときの率直な気持ちは。

青森を拠点に、高校教師として、劇団の主宰者として活動しています。青森で暮らしていますが、秋田のことはいつも気にかけていました。ふるさとへの恩返しになると思い、演出を引き受けました。普段、自分の劇団でミュージカルを上演することはありませんが、ミュージカル自体はとても好きだし、興味があります。スタッフのみなさんの力を借りてこれまでにない新しい表現を目指したい。不安よりも楽しみの方が大きいです。

―どんなミュージカルにしたいか。

秋田には秋田音頭、秋田県民歌というお国自慢の歌があります。秋田県民には奥

ゆかしいイメージがありますが、実はお国自慢の達人です。出演者も、スタッフも、観客も「秋田に生まれてよかった」と思えるようなミュージカルにしたいです。いつまでも東京中心ではありません。田舎で暮らしたいとか、ふるさとに帰りたいと考え、移住する人も増えていると聞いています。

―公募で集まった出演者によるワークショップが進んでいる。

元気で明るい人たちが集まってくれました。一人一人の個性を見極めて、生かせるような舞台にしなければなりません。ただ新型コロナウイルスの感染拡大により、2月のワークショップが開催できなくなりました。演劇、歌、ダンスの楽しさを感じてもらいながら、じっくり配役を検討する予定でしたが、残念ながらそうもいけなくなり、オーディションを何度か重ねて対応しました。

―今後の進め方は。

脚本は第3稿までできていて、ほぼ仕上がっています。脚本家の栗城宏さんからは現場で臨機応変に直してもいいと言っています。出演者全員に楽しんでもらうことを第一に、稽古を重ねていきたいと思えます。舞台に立つ人が楽しまないと、観客も楽しめません。アイデアを練り上げ、試行錯誤しながら舞台を作り上げていきます。出演者全員がいろいろな役割を常に担い、総員フル稼働の舞台を目指しています。



はたさわ・せいご

1964年、五城目町生まれ。劇作家、演出家。劇団渡辺源四郎商店主宰。2005年「俺の屍を越えていけ」で日本劇作家大会短編戯曲コンクール最優秀賞。ラジオドラマの脚本で文化庁芸術祭大賞など受賞。現役高校教員であり、演劇部顧問として指導した高校を11回の全国大会に導き、最優秀賞3回、優秀賞5回受賞。2022年1月、ホリプロ「hana-1970、コザが燃えた日-」（主演：松山ケンイチ）の脚本を手掛けた。

秋田から世界へ発信を

―ミルハスへの期待は。

人が集まる場所がなければ、新しいものは生まれません。ミルハスができることで、これまでになかったものがきっと生まれるはず。ミルハスには多くの人が出会ったり、一緒に何かを創造したりする場になってほしい。私も、青森で指導する高校生や、主宰する劇団「渡辺源四郎商店」の公演を実現したいと考えています。旧県民会館は高校時代、市の合唱祭の舞台に立ちました。大学の学祭ステージもこの会館でした。隣接する図書館には受験勉強のために通いました。思い出は尽きません。

―秋田で活動する演劇関係者へメッセージを。

演劇は一人ではできません。観客も含めて、人が集うことで成立します。人と人をつなぐツールです。秋田にはわらび座があり、地域劇団も多く活動しています。東京に行かなくても、秋田から全国へ、世界へ発信できる時代だと思えます。ミルハスの開館を契機に、秋田からどんどん発信してほしいです。



演劇ワークショップで指導する畑澤さん

ミルハス開館記念イベントとして、県民・市民参加型ミュージカル「櫻の記憶・蓮のトキメキ」が2023年1月14、15の両日、中ホールで上演される。出演者は公募で集まった県民の皆さん。昨年12月から演技、歌唱、ダンスの3部門のワークショップで練習を重ねている。

ワークショップでは、演技、歌唱、ダンスの楽しみを感じてもらうことからスタート。ワークショップを重ねるごとに出演者同士が積極的に会話、交流するようになり、みんなでミュージカルを作り上げるという仲間意識も醸成されてきた。

演技のワークショップでは、演出家の畑澤聖悟さんの指導の下で、ゲームや雑談などをした後にその様子を台本に書き起こして演じたり、ミュージカルの台本を実際に読んだりしながら、テンポの取り方や間の取り方、息継ぎの箇所などについて学んでいる。畑澤さんは青森市在住のため、新型コロナウイルス感染拡大により来県できないこともあり、助手の畠山健さんと協力しながらリモートでの指導も行っている。

歌唱は、音楽監督の渡部絢也さん、助手の茂木美竹さんが指導。「浜辺の歌」や「ふるさと」、ミュージカルナンバー「トゥモロー」などを歌った。渡部さん、茂木さんは一人一人に声を掛けるなど丁寧な指導で、出演者の歌唱力も上がっている。

ダンスは、振付の新海絵理子さんと助手の高橋紗輪子さんが指導。ストレッチや柔軟体操に続き、体全体を使ったウォーキングの仕方や、ミュージカルナンバーに合わせてのダンスなどで汗を流している。

今後は、主要スタッフの決定に続き、脚本やミュージカルで使用する歌やダンスに合わせた練習を重ねていくことになる。

Pickup



蓮のトキメキ

櫻の記憶



県民・市民参加型ミュージカル



音楽に合わせて体を動かすダンスのワークショップ



演じることの楽しさなどを学ぶ演技のワークショップ



指導者を前に1人ずつ歌を披露する歌唱のワークショップ

あらすじ

県民会館が誕生した昭和30年代から、県民会館に親しんできた家族の3世代にわたる物語。

物語は、ミルハス開館後の2023年4月からスタート。80代になった主人公・明子の人生の歩みを当時の秋田の文化や風俗を織り交ぜながら振り返る。いろいろな壁にぶつかりながらも、芸術や文化の力で乗り越えていく姿を生き生きと描く。

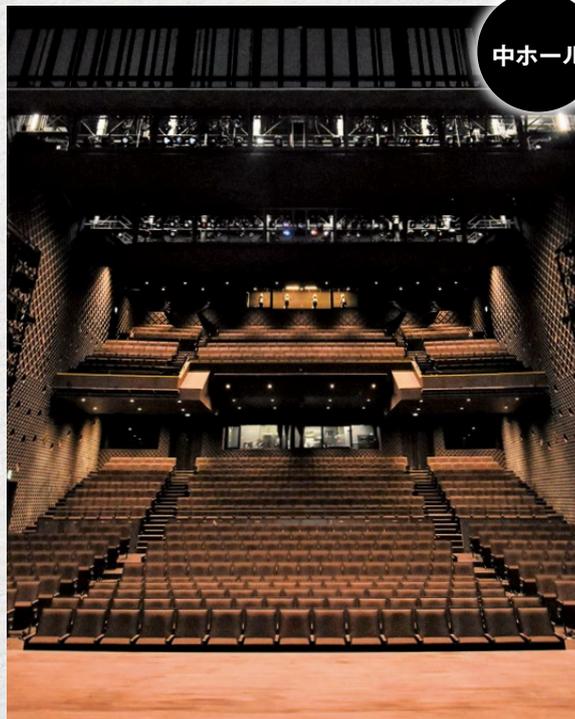
脚本	栗城 宏 (劇団わらび座)
演出	畑澤 聖悟 (劇団「渡辺源四郎商店」)
音楽監督	渡部 絢也 (作曲家)
振付	新海 絵理子 (振付家)
演出助手	畠山 健 (シアター・フォコンブル)
音楽監督助手	茂木 美竹 (茂木美竹ミュージック・ルーム)
振付助手	高橋 紗輪子 (ダンススタジオS.T.Rays)
美術プラン	袴田 長武 (舞台美術家)

(敬称略)



楽屋

大ホールは9室を備え計約100人が、中ホールは7室で計約80人が利用できる



中ホール

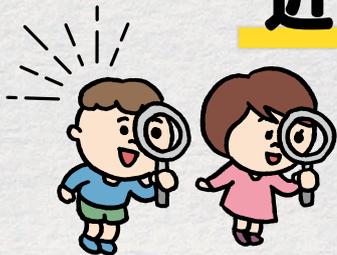
落ち着いた雰囲気の中ホール。秋田の舞台芸術活動の拠点となる



練習室

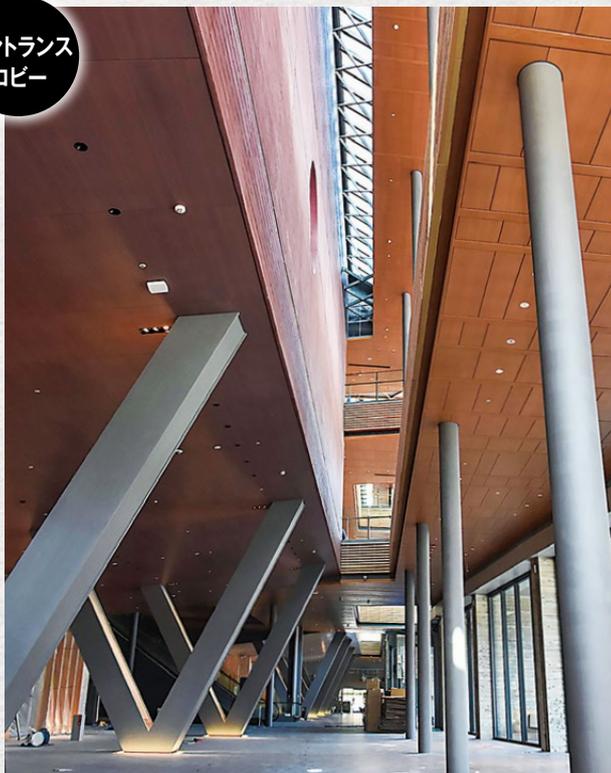
練習室は9室。楽器演奏、合唱、ダンスなどに対応する。練習室のほかに研修室3室、創作室5室もある

近づく開館「ミルハス」に ズームイン!



ミルハスは6月開館、9月グランドオープンに向けて準備が進んでいる。開館が近づいた建物内は一体どうなっているのか。仕上げが進む館内を巡った。

エントランスロビー



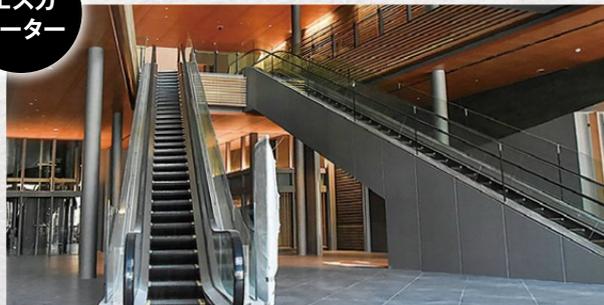
1300平方メートル超の広々とした空間。客だまり、ミニコンサート、芸術・文化情報の発信、来館者の休憩・交流など幅広く活用する。中央部にはエスカレーターを設置

小ホール



小ホールは4階と地下1階の2カ所にある。小規模公演や大・中ホールで行われる公演のリハーサルなどに対応する

エスカレーター



視聴4400回超!

ロックや民謡
ダンスなど配信

グランドオープン1年前カウントダウンイベント(昨年9月中止)代替企画

熱いステージ オンラインで

熱気あふれるステージをオンライン配信。ロックや民謡、ダンスなど各分野で活躍する本県アーティスト5組の無観客ライブ映像が2月2日から25日まで、ミルハスの公式YouTubeチャンネルで配信された。期間中の視聴回数は4468回に上り、出演者からは多くの人にパフォーマンスを見てもらったことを喜ぶ声が上がった。

配信映像は出演者ごとにまとめた。3人組ロックバンド・鴉(からす)がパワフルなステージを繰り広げ、歌手でラジオパーソナリティーとしても活躍する藤田ゆうみんさんが伸びやかな歌声を響かせた。男鹿睦実会と男鹿子ども民謡教室は秋田民謡などを披露。新屋高校吹奏楽部は息の合ったサクソフォン四重奏を奏でた。秋田市のダンススタジオCHEE:SE(チーズ)は躍動感あふれるパフォーマンスを見せた。

出演者はインタビューにも応じ、「幅広い世代が活躍する場になってほしい」「若者が好きなアーティストに来てほしい」「広く愛される施設になってほしい」など、ミルハスへの期待を語った。

多彩なステージは反響が大きく、視聴は4400回を超えた。鴉のメンバーは「注目されている施設の開館前イベントということで多くの人に視聴してもらえた。初めて鴉のライブを見た人もいたと思うのでうれしい。今度はミルハスで有観客のライブをやってみたい」と話した。

映像は秋田市役所や同市のエリアなかいち、ふれあーる



AKITA(フォンテAKITA6階)の大型ビジョンやモニターでも流された。

オンライン配信は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて中止となったグランドオープン1年前カウントダウンイベント(昨年9月23日)の代替企画。配信開始日は開館記念式典(6月5日)の123日前、終了日は100日前に当たる。収録は1月15日に市文化会館・小ホールで行われた。



オンライン配信された多彩なステージ。(左上から時計回りに)男鹿睦実会と男鹿子ども民謡教室、新屋高校吹奏楽部、藤田ゆうみんさん、鴉、ダンススタジオCHEE:SE

Mille Has information

6/5 SUN 開館記念演奏「大いなる秋田」

開館記念式典・第2部 会場：あきた芸術劇場ミルハス（大ホール）

一般観覧者 400人無料招待

待望の劇場がいよいよ始動へー。秋田の新たな芸術文化拠点となるミルハスの開館記念式典が6月5日に開かれる。式典は2部構成。第2部の記念演奏では大ホールで「大いなる秋田」が演奏され、400人を一般観覧者として無料招待する。

記念演奏は秋田吹奏楽団が演奏し、県内の小中高生や民間グループが合唱する。ミルハスのアドバイザーに就任する秋田市出身の指揮者・佐々木新平さん（ヤマハ吹奏楽団常任指揮者）がタクトを振る。200組、計400人を公募で招待する。4月から観覧希望を受け付ける予定で、募集方法は県・秋田市・ミルハスのホームページなどで周知する。

佐々木さんは「ミルハス大ホールに最初に響き渡る音楽は、やはり

『大いなる秋田』。秋田の音楽界の根幹にあり続けるこの偉大な作品を、新しいホールとともにさらに輝きあふれるものにしたい。これまで演奏されてきた伝統に敬意を表すとともに、新たな息吹をこの作品に与えたい」と張り切っている。

記念式典の第1部は県、市、県内芸術文化団体の関係者ら約400人が出席し、中ホールで開かれる。中ホールの緞帳（どんちょう）の披露、事業関係者らへの感謝状贈呈が行われる。由利高校民謡部による郷土芸能が式典に花を添える。



秋田吹奏楽団



記念演奏の指揮者を務める佐々木新平さん

千秋小径

sensyu-komichi



作家の向田邦子さんは食べ物についてのエッセイを数多く残しているように、美食家であった。もっとくだけて食いしん坊といった方が適切かもしれない▼一方で整理整頓は苦手だったようである。一念発起して新しい整理棚を購入した。税金、年金、

名刺、手紙など抽斗（ひきだし）ごとに分けて片付けることにしたが、あつという間にごちゃごちゃになった。ただその中で唯一、他のものと混ざることのなかった抽斗が「う」と名付けられたものだった。「う」は、うまいものの略である。この抽斗をあけると、さまざまな切り抜きや、葉が入っている」と綴っている▼あきた芸術劇場ミルハスのオープンに向けて、カウントダウンが始まった。劇場の全貌が現れ、その大きさに圧倒される。夕方に内部の明かりが灯った際には、お堀と相まって温かな雰囲気醸し出していた▼まだ公表できないが、国内の著名オーケストラや演奏者、ミュージシャンからコンサート

の予約が入っている。“ご祝儀相場”的な面もあるだろうが、施設管理者にとってはうれしい限りである▼県民のみなさんにはミルハスでたくさんのコンサートを堪能し、思い出をつくってほしい。9月23日のグランドオープンで新日本フィルと共演する小山実稚恵さんは「生の音を聴くことは贅沢であり、人間の幅も広がる」と話している▼オープンを機に、新たな抽斗を用意する人が出てくれればと思う。向田さんのエッセイにならえば、「ミ」の抽斗である。「ミ」はもちろん、ミルハスのミ。チケットやパンフレット、新聞の切り抜きなどでいっぱいにしてほしい。思い出も一瞬でよみがえる。



あきた芸術劇場
Akita Arts theatre
ミルハス

Mille Has

<発行>あきた芸術劇場AAS共同事業体
〒010-8572 秋田市山王三丁目1番1号
秋田県庁第二庁舎3階 創業支援室B-7
TEL.018-838-5822 FAX.018-838-5825
E-mail/info@akiat.jp https://akiat.jp

